

サービスハウス通信

第16号
H24年3月25日
発行
社会福祉法人東光会
サービスハウス 事務室
TEL084-941-5255



お彼岸も過ぎて、春めいてまいりました。桜の開花が待ち遠しい今日この頃です。

少し遅れた感がありますが、春日事業部に飾られたお雛様の写真を掲載いたしました。



サンビレッジ 2 階のお雛様



サンビレッジ 4 階のお雛様 (写真提供: コヨリ)



サービスハウス手作りのお雛様

ひな祭りによせて 頼久裏 独歩

今年(平成十二年)の春でした。鞆・町並み雛祭りマップを手にすることが出来たのです。第十回とあり、もうそんなに回を重ねてきたのかと実は驚きました。

私は、既に齢九十歳ですから十年前を考えてみますと八十歳でした。年下に進さんと言う友人がいました。彼も福山の人で、二人でよくカメラを手に鞆へ足を運んだものでした。このひな祭りへは一回目か、二回目か定かではありませんが、進さんの息子さんと日曜日なら鞆まで、車に乗せて行つてやるという約束が出来て、行きは良い良いで鞆のバスセンターで降ろされ、彼は自宅へと帰って行つてしまいました。

二人はカメラを首から下げ、ひな祭りマップを手にしてひな祭り旗のある



場所へ歩き始めたのです。先ずはここから行こうかと、目の前の「万力家」と言う個人住宅に行きました。玄関の扉が開けられ狭い畳の間に手作りだと自慢する雛飾りがありました。次の「ちいちゃん美容室」は小さなウインドウに飾られており、「大浜家」「釜谷家」の両玄関の飾り棚にはささやかな雛が並んでおりました。一つ一つを取り上げていくのは大変です。そろそろ昼近くなつていましてので角にある食事処に入ることになりました。品書きを見ながら二人で同じ刺身定食にしようと思ったのです。新鮮な小魚を味わいながら食べたのです。支払いは割り勘と決めていましたから気を遣うことはありません。食後のコーヒーも同じです。

昼から、保命酒等の酒舗を営む店の多い通りへ入ってきました。これ等の店舗でのひな祭りは、豪華な段飾りを見せていましたよ。来店のお客様には保命酒をサービスとして飲ませていました。初めに目につく「入江保命酒本店」、向かいには「八田保命酒舗」此の辺りの店舗は、間口にも広く、ひな飾りも段飾りが多く見られました。何しろ道路幅が狭く交通整理が行われ大変です。担当の人が、東行きは前進、西行きは一時

停止と交互に通行させていましたが、何しろ車の数の多いことには、見ている歩行者に当たりはしないかとヒヤヒヤしていました。

やっと「入江保命酒資料館」にたどり着いたのです。館内奥深く工程を見せていました。ここでは保命酒を温め飲みやすくして見学の人々に振る舞っていました。二人も保命酒を味わい鞆の津の商家へ歩を進めました。その名の如く商家ですから、内部は部屋数が幾つにも分かれ部屋ごとに古くからのひな人形が飾られていたのです。商家の番台では、番頭の装いで見学者を迎え入れていました。よくお似合いです。たよ。商家を過ぎてからは、大して見る程の店頭もなくなってきたようでした。

船具店の角を海岸の方へ曲がり、「深津屋」という和風の茶房に入りコーヒータムにしたのです。ひな人形に押されたようになりに歩いてきたようでした。内部は和風茶房の造りです。一杯のコーヒーに喉を潤してやっとな落ち着きました。茶房の向角は保命酒屋酒造で「薬味酒十六味保命酒」を売り出していました。船具店の反対角から西へと食事処が軒を並べていました。深津屋茶房から海岸へと歩を進め常夜燈まで行きました。

後戻りをして、最後は「岡本保命酒本店」の雛祭りを見て、「雛祭りぶらり」を終わりました。帰りはバスに乗り、約三十分で福山駅前に到着したのです。この後、撮影した写真のプリントの整理も大変でした。

シベリアへ送られて



郡 誠司

ダモイと体力検査

昭和二二年十月(一九四七)だったと思います。ある日、例によってソ軍ドクターの体力検査行われていました。今回の検査によって三級と判定された者が六十名もいました。彼等がラーゲリの第一次ダモイとなったのです。この夜、特別に張られたテントに収容され少ない所持品ですが整理に忙しそうにしていましたよ。この中に、以前、僕とレンガ工場でプレナー作業をしていた植村兵が居たのです。彼を訪ね「元気でナ」と短い言葉を交わし寂しく別れたのです。

一夜が明け作業から帰った時には、もはやテントは無くなっていましたので。とうとう彼等はダモイしたのか、一抹の寂しさがこみあげて来ましたが、次のダモイの際は残留者全員となるのに違いありません。

ダモイ「自宅へ」の意
帰国。帰還。「第二次大戦後、ソ連に抑留された日本人が帰国の合言葉として用い流行した



衛門の自由出入

シベリアにも夏がありました。この暑さを身に受けながら作業を続けております。この頃でした。ラーゲリから二、三十分の歩きで行ける範囲に重工業地域がありました。この地域にある作業場へ行く二、三組が衛門を出入りするのに行き先を告げ人員点呼を受ければ警戒兵無しで自由出入りが出来ていました。帰る五時はロスキーの行動で会得して居りました。

この地域には製鉄・機械・発電所等があり、これらの地域では尚も拡張の為基礎開発が進められていました。大きな堀を掘る作業です。二米×二米×深さ三米もありましたから、作業兵たちは深くなるにつけ二段階構えで土を掘り下げていたのです。一度途中の台に掘り上げ、途中の、掘り上げ台からもう一度、地上へと上げる工程、二人で手間のかかる作業でした。僕と京城兵とでした。一度は監督が来ますが指示通りの作業を進めておれば一日は過ぎて行きました。帰りも間違ってもラーゲリへ帰りますから衛門で問題の起きたことはありませんでした。

この頃は暑い時でしたから、五時前から京城兵と二人して現場を抜け出し、発電所の温水プールへ行つて、ザボンと裸で身体を洗って帰った事もありました。

ちようど、この時でした。女囚人達の一団が女子警備兵に監視されながらこの温水プールに入ってきました。四、五十人でしたが、警備兵は三人も居る厳しいものでした。石炭の貨車降ろしで真っ黒になった身体を洗っていましたが、囚人となると扱いがこも違うものかと驚きました。

入室(ラーゲリ)の病室

次第に寒さが増して、既に冬の服装に着替えていました。これから日増しに極寒の日々が訪れようとしていきます。そんな寒い日の朝起きると昨夜からとても身体がだるくてしょうがない。それでも作業へ行つたのですが、午後になってとうとう熱っぽくなってきました。それでもフワフワしながらやつの思いでラーゲリへ帰って来たのです。

夕食も、そこそこに医務室へ行つて軍医の診察を受けたのですが、体温計は三十八度を超えていたので。即座に「入室せよ」との決定になり、木村兵組長に入室を告げ飯盒を持って医務室へ行きますと、衛生兵が着替えを用意して待っていてくれました。

飯盒を渡し明日からの食事をお願いし、洗濯された肌着に着替えを済ませてベッドの患者になったのです。病室は一〇台のベッドが並んでいました。患者は僕を入れて八人寝ていました。皆病人だから黙然としています。朝の点鐘に目が覚めたものの「今朝は起きなくても良いのだ。」と思うとまた眠ってしまったのです。

間もなく、病室のドアが開いて二人の衛生兵が飯盒に入ったスूपとパンを運んできました。患者はベッドに起きて互いの顔を見合わせるでもなく黙々と食べ、終わるとまた寝てしまうのです。軍医の回診があ



りましたが一夜にして、三十八度はたいて下がってもいなかったのです。それでも薬の一粒も飲ませてくれません。熱発ぐらいいは寝ていけば平熱になると、衛生兵は言い聞かせるのでした。このあたり、ソ連流にも似てきています。「よし！寝ていようだ。」

三日目には平熱に戻っていたのです。午後になって軍医が「夕食後、退室」と衛生兵に告げに来たのです。三日間休養させていただき、感謝して作業に復帰することが出来たのでした。



昭和二十三年(一九四八)

ラーゲリで生活する我々の身にも時間だけは公平に刻まれていました。三六五日を一つ一つつぶしながら昭和二十二年は去っていったのです。明けて二十三年元旦を迎えたのですが、この地へ来てから二年と三ヶ月が経過していったのです。ダモイはいつの日か分かりませんが、確実に近寄っているのには間違いありません。今朝も点鐘が鳴らされ起床の合図です。

二十二年のスペシャルメニューと変わりありません、黒パンが白パンに変わったこともありません。カーシャ(粥)の中身が雑穀ではあっても、粘りの強いキントンにも似た美味なものでしたよ。そのほかに甘い味わいは美味への憧れでもあったと言ってもよろし

いかと思います。一日の休養は早い日没によって夜長に入り、組中が寄っては故郷のうまいもの自慢に花を咲かせいつまでも続くのでした。

休息の家(優良兵たち)

作業から帰ると足早に飯盒を提げて炊事棟へ行くのがいつもの事なのですが、入口に壁新聞が張り出されていたようで、新聞を取り巻いて読みふけているようでした。誌面は、新聞一枚分の大きさがありません。手描きでありませんが内容は充実しており、筆耕者たちは大変なご苦労があったと思います。誌面を余すところなく読んでいるうちに、端末の一面に優良作業兵の名前が二、三人載っていました。その中に僕の名前がありました。これで二回目だったのです。

それから一週間過ぎた頃、本部から僕に休息の家に入るよう指示があったのです。休息の家には一回十人が入ることができ、一週間の休息が与えられるのでした。

日曜日の午後浴場へ行ってみますと、各棟から休息者が集まり十名の顔ぶれが揃っていました。浴室から出るや、禪のほかは真つ白の襦袢と袴下の姿になり休息の兵たちはどこことなく浮き浮きした笑顔で好き好きにベッドに寝転んでしまったのでした。

この家には三級の軽作業兵が一人、休息兵のために食事と掃除係として付き添っていたのです。この兵のおかげで、一週間は「据え膳あげ膳」の生活の中に過ごせたのでした。食器もアルミの食器でしたから、尚も美味しく食せたとおもっています。食事が終わりますと刻みタバコを吸いながら

「お前は、何処の作業場だった？」
「お前はどこだ？」と聞きあっていたましたが、十人がそれぞれに違っていて全然知らなかった作業場もあり驚きでしたよ。

休息の家とはいうものの、娯楽用具があるわけでもなく、「何もしなくてよろしいから、ゆっくりと休んでおりなさい。」こんな分かりやすい事はありませんでした。「では、寝てしまおうか」それで良かったのです。

軽作業兵がドアを開ける音に目を覚まします。夕食の時間が来ていました。「良、眠ったよなあ」皆で顔を見合わせいったものです。組の事も何も考えることなくいましたもの。スープとカーシャを入れた食器が運ばれてきます。「いただきます」無言で食べています。味が美味と思いつつも、味わい方には違いがあるのかも。今日の給食はすべて終わってしまいました。第一夜は誰も、話は進まず、早く寝たかったのでしょうか、さっさと寝てしまいました。

明くれば月曜日の朝でした。今日から週末まで作業に出ることもありません。襦袢と袴下姿でベッドの上で太平楽に過ごせたのでした。軽作業兵が「おはよう」と言って朝食を運んできてくれました。黒パンとスープです。

白パンが顔を見せることなど先ずありません。スープも日頃と同じです。それを美味しく飲む。終わってもタバタ作業へ出る支度もいらない。そこが休息なのです。マホールカ(刻みタバコ)を一服吸うにも手間をかけて

火種を作つてでない口に来ません。現地へ来てからロスキーの習慣が身に着いた仕草でもあったのでした。この休息の家に入った恩恵は二度と巡っては来ないと思わねばなりません。一日一日が感謝しながら過ぎて行くのでした。



三日目でしたか。夜のひと時、ハルピンのバンドに居たという長谷兵が本部からアコーディオンを持って演奏に来てくれました。日頃は作業場に出ている通訳でしたから、御苦労さんでした。「今夜は皆さんの好きな曲を演奏しましょう。曲名を言って下さい」そう言われると曲名が出ない。「日本の流行歌を何でも良いから聞かせて下さい」お任せになった。どんな曲が聞けたのか思い出せない。二時間近くも雑談を交え経過したのですが、その夜は珍しくうつとりとなり長谷兵に感謝して心地よく眠ったのでした。

余すところ一日と目前に来ていました。翌日の午後外出許可が出ましたので、ソ連下士官引率でローカル列車に乗せられ、クラスノヤルスク市内へ行ったのでした。

駅を早めに出て公園へと行ったのですが、詳しく説明の出来るほど見物が出来たとも言えず、こちらで休息の家についてペンを置きたいと思えます。

次号へ続く

季節外れの思いで

中島 榮

確か、五歳の夏の夕方、土橋の上を歩いていたとき、急に目がくらむ光の扉にあった。まぶしくて、先が見えず、どうして土橋を渡り終えたか今でも分からない。けれど、渡り切った後を振り返ったうす紫 うすいブルー かすかなオレンジの光 新しい浴衣が じつぱりとなっていたのを覚えている。今思えば、私は虹の中を歩いていたのだとわかっている。きらきら光るまぶしい霧雨 夢中で走り抜けて、後を振り返る。こわごわと なんと大きな色の壁 虹の中を走ったとはその頃は わからない 見る間に消えた虹 土橋の向こうは雨が降っていたっけ……



君の名は？

中島 榮

君の名は？と尋ねし人あれば 僕は、命 と答える
君の名は？と聞く人あれば 私は、魂 と申します
いずれも目には見えない 然し あることは事実だ
良くも悪くも両親良心によって決まる どう、悪いことしようよ
どんなこと……
人を泣かすのさ やめようよ
だって、父母(良心)に叱られるから という風にゆけば
世の中和だろうな。 ある日の思い



お彼岸について



彼岸(ひがん)とは、煩惱を脱した悟りの境地のこととで、煩惱や迷いに満ちたこの世を「こちら側の岸」「此岸」「しがん」と言うのに対して、向う側の岸「彼岸」という。

「彼岸会(ひがんえい)」は、雑節の一つで、春分・秋分を中日とし、前後各3日を合わせた7日間のこと。また、この期間に行われる仏事のこと。曆の上では最初の日を「彼岸の入り」、最後の日を「彼岸明け」なお、地方によっては最後の日を「はしりくち」という地方もある。俗に、中日に先祖に感謝し、残る6日は、悟りの境地に達するのに必要な6つの徳目、六波羅蜜を一日に一つずつ修めるためとされている。

春分の日や秋分の日といえば、昼と夜の長さが同じ日とされている方も多いのでは？

確かに私自身も、春分の日と秋分の日には太陽が真東から昇って真西に沈むので、昼と夜の長さがほぼ同じになる日と小学生のときに習った記憶があります。

しかし、今年の春分の日明日の東京の日の出日の入り時間を調べてみると、日の出は5時45分、日の入りは17時53分。(こちら東京の日の出・日の入で確認できます。)
昼の長さは12時間8分と、昼間が16分長いことが分かります。
実は昼の方が年により差がありますが、平均して14分ほど長いのです。
さて、そのカラクリは？！

昼の方が長くなる理由は大きく分けて次の2点が関係しています。

(1) 大気の影響

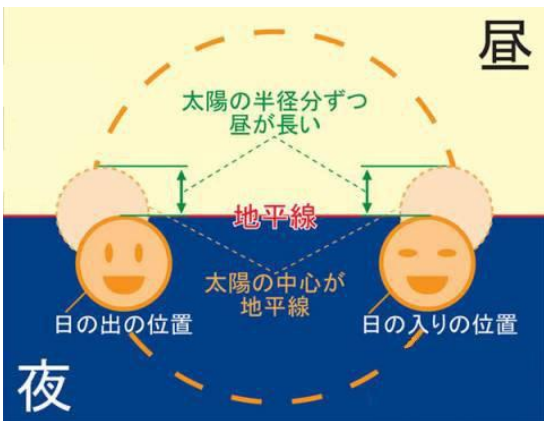
地平線付近にある太陽からの光線は、大気中を通過する際に屈折して私たちの目に届きます。このため、実際には地平線の下にある太陽が、見かけ上、地平線の上に浮き上がって見えます。

つまり、日の出のときは地平線の下にあるときから見かけの太陽が見えていて、日の入りときは地平線の下に沈んでいるのを見かけの太陽がまだ見えているという現象が起っているのです。

(2) 太陽の視角

日の出・日の入りを太陽の中心ではなく、日の出は太陽の上の縁が地平線に接した瞬間、日の入りは太陽の上の縁が地平線に沈んで見えなくなった瞬間と定義しているため、太陽の半径分、日の出が早く、日没が遅くなるのです。

したがって、太陽一個分ほど昼の方が長くなります。これを説明した図が次です。



以上2つの効果が加わって、昼の時間はさらに長くなります。
実際に昼と夜の長さが同じになる日は、春分・秋分の日よりもそれぞれ3日ほど冬至側にずれた日になるのだそうです
(TENKI-JP)より

編集後記

彼岸の中日は昼と夜の長さが同じではなかったとは、驚きでした。桜の開花ももうすぐですね。花がいつばいの季節が待ち遠しい今日この頃です。

河村